

## 十一 自力のはからい

御念仏の世界では、自力のはからいをはなれるということが一番大事なこととせられる。それは自力のはからいがある間、如来本願の光力がその人のものとならないからである。日が出たら闇が無くなり、あたたかくなり、氷がとけ、草木は青々と大きくなる。もし精神界にも尽十方の智慧の日が出たち、心の氷はとけ、荒い粗末な心は柔軟な心となり、信の泉がわいて念仏の花が咲くのである。まことに信仰は話でなくて、事実以上の事実である。

もし十日も百日も日が出なんだら、我も人も皆死んでしまうのである。仏日もそれと同じことであるのに、十日や百日どころか、生れて来てから一度も仏日を拝んだことがない者には、膿血の流れているのが見えない。恐るべき癌の持主であることがわからない。心が氷になって、人を善悪で裁いているのが見えない。親子がいがみ合う、兄弟が敵となる。家が暗い。不平や愚痴が出る。みんなごもつともなことである。生きていても死んでいるのである。五欲煩惱の享樂に走っても、心の底には満足せぬ後味の悪いものが残っている。

み光に照されて御念仏を回向せられると、はじめて真に生かされることを感じ、衷心の満足が与えられる。念仏の前に何ものを要せず、念仏の後に何ものもいらぬ。念仏とは最初にして最後なるもの、まことに信の一念には、何物をもさしはさむ余地がない。全一なるもの、絶対無限なるもの、南無阿弥陀仏がひとりものを言つて、この善悪賢愚の相対有限なる我の全てを、その大悲心光の中に攝取して、余すところがないのである。

しかるに念仏して猶その次ぎに、その念仏をさらに倫理化する必要があったりすれば、それは真宗念仏ではない。念仏より外にひそかに善根を求め、美しい心を必要とする、それが定散二善の自力のはからいである。南無阿弥陀仏に全我を攝取されていないが故に、自分で自分の始末をつけねばならぬことがおきて来るのである。

南無阿弥陀仏一つで全てが解決する。信の世界は全我が大行の規定の中にある。汽車に乗れば全我が汽車の方向と速度との規定の中にある。汽車の意は乗手の心である。汽車の中でも歩きはするが汽車の足しにはならぬ。本願円頓一乗の汽車もその通り、全我が本願の法則の中にある。であるから、廃悪修善の自力ではなくて、転悪成徳の全我的な価値の転成が可能なのである。

いったん本願の汽車に乗れば、外を眺めようが、読書しようが、居眠りしようが、すべて本願の汽車の法則の中にあつて自力無効、裏をかえして言えば、「為さねばならぬこともなく、為してとがあることもなし、絶対自由無碍自在、六字の靈火に燃ゆる身は」である。

もし人の上に悲しむべき相が見えた時には、直ちに善悪で裁いてはならない。否、裁く心を見て念仏しなけばならない。理論的には宿業とわかつていても、気毒な宿業とは見えないで、すぐに善悪を言い、その人に念仏を求めずして倫理的な善を求め。それがそのまま鬼である。涙も血も枯れ果てた心である。

自分にさへ如来廻向の念仏より外に、善と認むべきものは無いではないか。それであるのに人に念仏より外の善を求めてよいであろうか。嫁が悪かったら、治そうとせず、家中が皆で念仏するのだ。何時かは嫁が全我を投出して来る。誰を見ても、「念仏を聞いたことが無いのに無理はない無理はない」と思うこと。誰よりもまず私が念仏一本で樹つことが大事である。

人間がその一生に何が起きても、ついに念仏一本で生きぬいて行かれるためには、誠に忠実にみ教を聞かなくてはならない。どんな不幸に沈む人でも、ほんたうに正法を聞信すれば、それを超えて無碍道を生きてゆくことが出来る。たとえ死刑になる人でも悠々と全てを超えて生きることが出来る。もし正法に忠実でなければ些細なことにも行詰つてしまふ。

死をさえ超えることの出来る念仏で日常の苦が超えられないことがあるか。超えられなんだら更に更に聞くのである。聞いて聞いて聞きぬくのである。本願にはからいなく信順するとは、正法に忠実に絶対に信順することである。正法をぬきにして自力のはからいをとろうとするのは、更に一つの自力に入るのである。聞其名号そのままの信心歓喜である。

真に聞いたものは一生必ず続ける。もし自力がとれていないと、大経のいわゆる「疑惑中悔」して続かない。疑惑中悔とは途中で疑いが起き、念仏に入ったことを後悔するのである。如何に多くの人が途中でやめることだろうか。しかし、もし続いたら、それは決して自力ではない。念仏が相続して一生を貫いたら、それは如来本願力の然らしめたもうものである。自分のはからいでも、人のはからいでも、自然の世界はこれをとどめることは出来ない。苦に会えば会うだけ枝ぶりのいい松のようになるであろう。続いた者にのみ念仏の本当の力がわかる。

自分の心の中にどんな煩惱が見えようと、それに真向きになつて念仏申すべきである。「私のような悪人では」と思う心、自力のはからいである。「私のような悪人なればこそ」である。如来の正覚華は泥の中に咲くが故に汚泥華といわれる。蓮華は泥の中に咲く。南無阿弥陀仏の蓮華は煩惱の泥の中に咲く。ゆめゆめ泥をつくねて蓮華にしようとしたり、泥を無くして蓮華を咲かせようとしてはならない。泥のまんまに念仏の華は咲くのである。

人生の生活経験の全てを、内に転ずるところに具体的な念仏生活がある。全てのことを宿業として背負いきるということは、大悲光明のお照しがなかつたら出来ることではない。光明の照破摂取によればこそ、一切の悪業煩惱を内に転じて大地に手をつくことが出来るのである。一切を大慈悲の大地に投げ出したところに、はからいはない。人間のはからいのつきたところには、本願のおんはからいのみがある。宿業のまがみ光によつて生かされてゆく、善くとも悪くとも、有難かろうがなかるうが、御念仏は仏恩報謝の行である。所行法体の名号そのままの念仏である。念仏一つで事足りることである。